は種れ不物要　三

雜
10
三

ロ 9
3585
3

曽イ門
號355
巻3

帰雁乃文下目録

一 女の手やうれる事
一 善悪ハ友によるといふ事
一 幸不幸の事 付り 儒者の娘乃事
一 殺兄ん乃悩やミ工夫れる事 付り 儒佛の理を引て功ある事
一 ようさ女殊教ゆる事
一 文章謬り乃事

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

門ロ9
號3585
巻3

吹雪の段の下

きたくやゝいづま瓦流とふんをつくしくれてされよとの
あだくふ心のでまさせ給はんよう文をそへしよ
おぼしめし待うけんづまれ流ごくより消息なんどおり
て待うつゞいて祈んはよ聲すおかしまうしそれも
やうにちうしわる雨しやさしう婦ずさちうとゑ苑
いづれ結んはあきむうでれ心のどそり寛山鳥の
花ぎうもとらけ給くちそあこにのそこら給うもひき
いつせいあるとこの野山をもまじうせ給ゐて表行
なそとれらんくやむおすそまさせやすにくどもなれ中の
事志あれよまぎれていとづゝふ基とくしいうお
しこてもうひきうて漸くつれさ應の内れ

花におもむきさびしけりなど作られけらし文章は
五月雨のふりつゞれゆる時はこくれるこゝろもひにくゝハ
いづこをとらそ行かすうくしさむしとぬとばいひてくくせ
旅なすぐらんにハ年ゝこれなからはかづくやいかならなと
おりしもしやそるすくれ然びしさもとしつゝ
いとせば三光もつゞれあはぬなく雲間のと
ひとくふ恋しくよしる人あるは何に旅によそにて給
旅でちくいと世旅へおもむくんとまる秋の月
いでなどもんにてんハ今宵ぞ望月とや申され
こともけるすくさやけよ雲るよもまたも夜もるゝ枕
風に人のこゝ旅と秋の月とやえどもく傾きさ大空
はまこみむことをとおりきしむかずおほずに見に秋夜

おぼしとともおぼしくいで猶さんとさくそゝ志のみかたをおもずは
おもしとてやすくらんうあるひいハ名を象にすりく書かあ
かゝりまさし藩九宿もうまいつて琴の音一夜もし見
歌ぞそき御じ見ゆなかそさらんくなつてぞやまつれ見
さるハせんざいうゝぎりうちまの影ふをも見んやかく
まゝ御時にハさむしつかハひぞも見えにくさよすれさうま
のこりやううんづまくもこそてまなやつくふおぼしは
まくらうらいさら菊とくらりしなずくらんよからう
たくいつこううしに秋の影もうららのばせらそて錦
どりし見をとるけりとにおりひくいは雨時雨ふうづくは
ひとくてともご御じ見けるもなかりしけりと見庭
のおもうけもみる山やおもゝまゝ見ずくくつさけれとこ

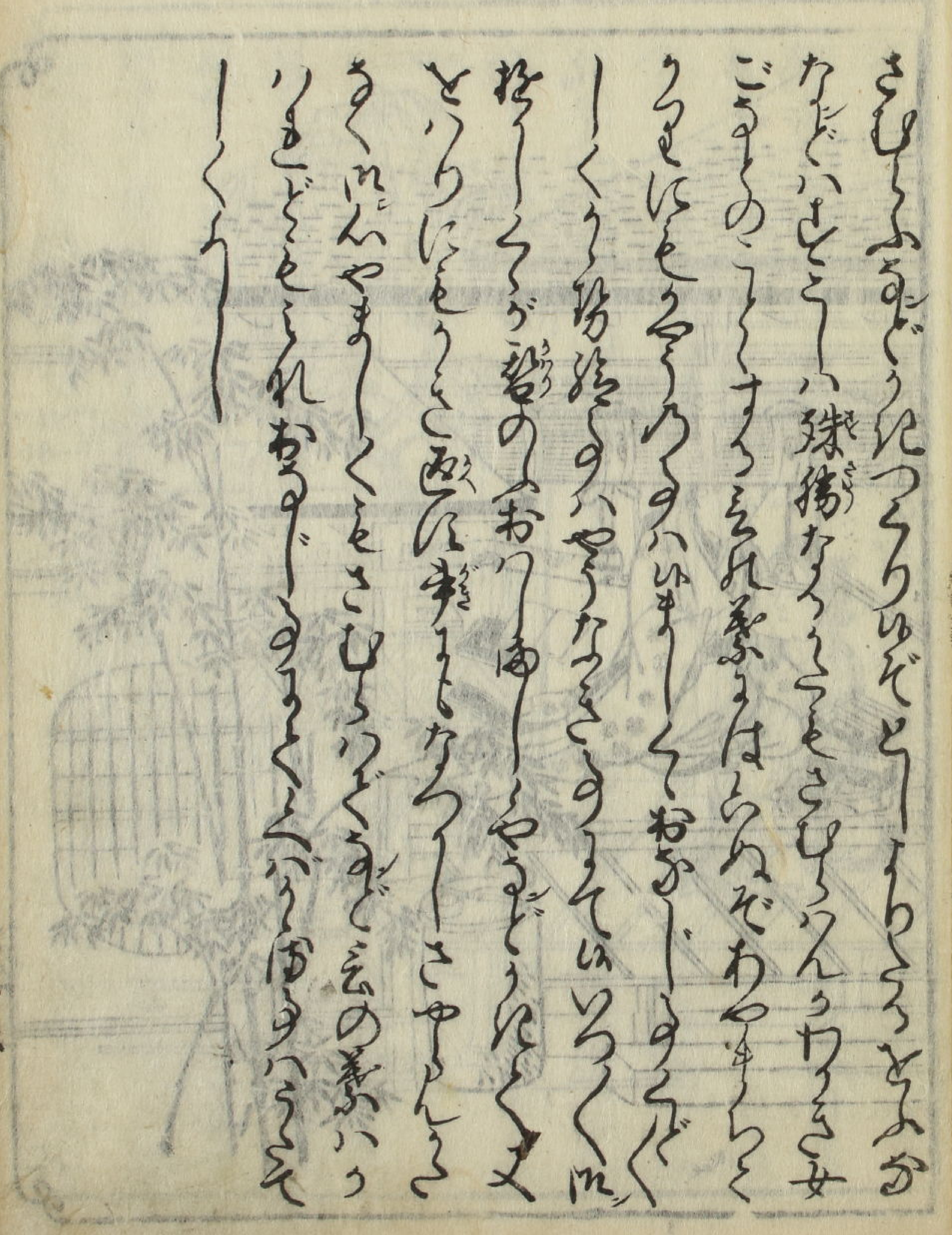
それにつけてもゆかしく思ひしこゝろさまこのころもは
へるがそれぞれいづく志るべとおくり給ふもそれに
こゝろづかれてこゝろけなきに八重の匂ひを九重にうつ
給ふならつる花秋をおもひ出れば庭もしらうさく
など偲ばまうしくことの外のなれなつかしく
しれらしき明くれ天の岩戸もひらくに、いつるまゝ
志づの盛もよ給ふびけり　梅が香かふしくうるび
をさそふ志るべよきおのがこゝろ家にほころび咲
のよのさくら花おちかりしもわもへばまさ咲花もされ
てはらんとまのうちふくとたのむにをこしは
裏までもとてそのうみたいなどを卯の花志給く
うちわたし書のうつしこゝろいるりして一志かふ

花衣おもひおりしなきとまづ来志づかりて一こゑ
夏もまそらもあけのそこはかとなく立よれはおつ
さうまくらなどかさしてぬ常盤の花をさうらと
られなくておもひ給ひさとしても幾千代かけ
常盤の松かげも川ゆくみづのあやうきも楽かはしさを
わすれてけるかなゆきはおかしうしさもしらぬに
や漸く秋風も立さしてかつ門田の稲葉おとづれて
比もなるかもりし雨もにきのふこそさかなくいつしか
しぐれのおもにとゝみしをまちけるすにおもむきい
らせはおくられ山もかのこゝおもわするゝ月かげをながめ
さむくらんとまちわびさうしくつるが今はふもさそ
がらあはれさむくふるまゝしうしうそ心ひさ

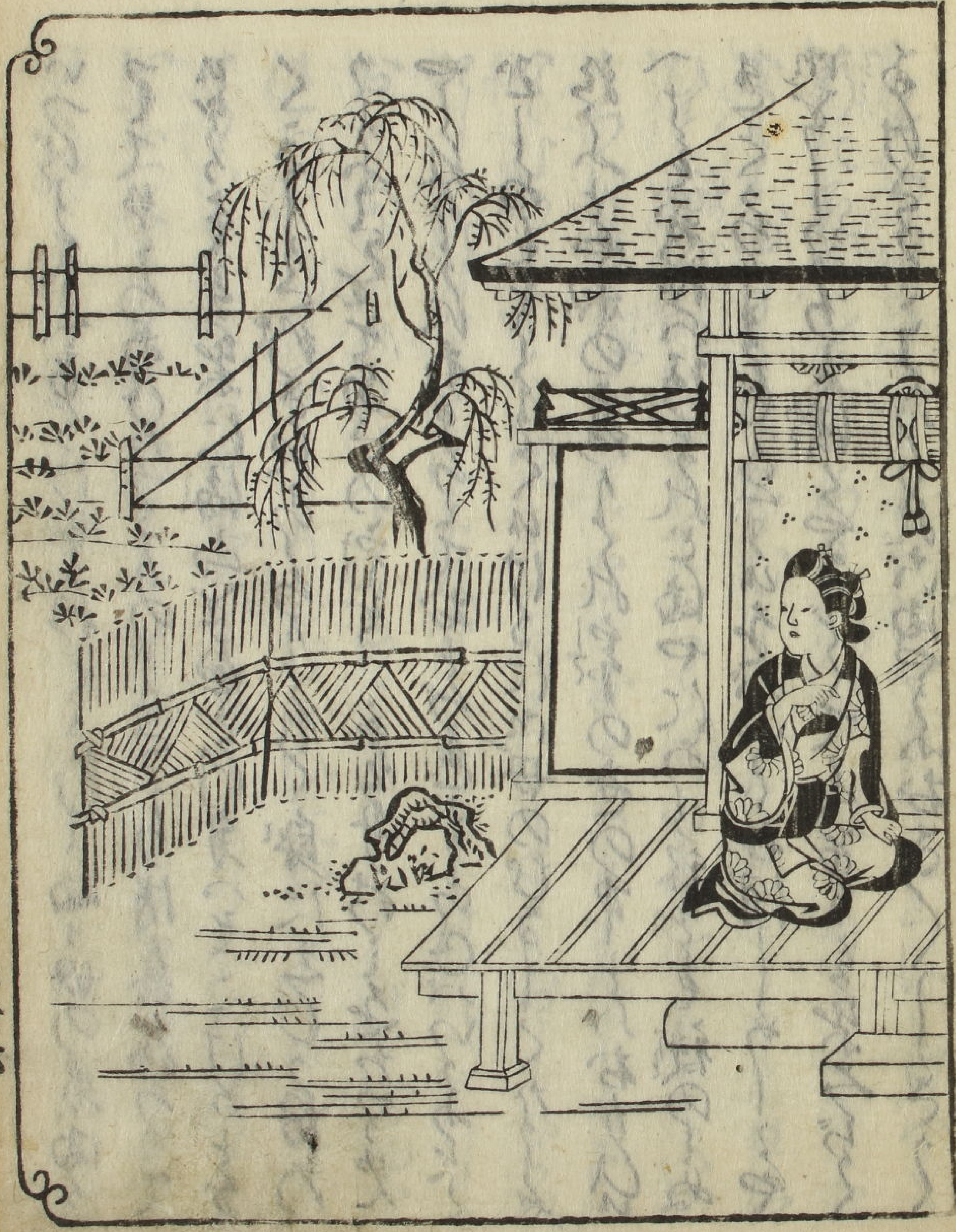
いくせく月にうつる萬代の舟人も月を詠おもむき
まくらそえ名ふのこゝろめぢ花よりひとめぐり
蘭ど嶺山より、いつらくさ咲こんふちくくりんま
いく路さくわりひくくさむしさとそ宿らいづるも
さくりのこゝおはよ方にてさむしくバものつらんづ
つらふおりひやられりしそのすまへ御縁んひろすへお
かりましくや昊なるうつくわりを求めさせ給ひてお
くゝせおゝしましくうし御志ざしをみまいらせ参
らそさむくへあらハまこそれけいこハおとをいひが
るれおよくいかなるをむらしはにんわらさ海にわそ
じゝへたとへバ宮れわしぬるどハかづらるゝ白雪
をとゞや葛のそれのこゝらいさしり　柳八まき

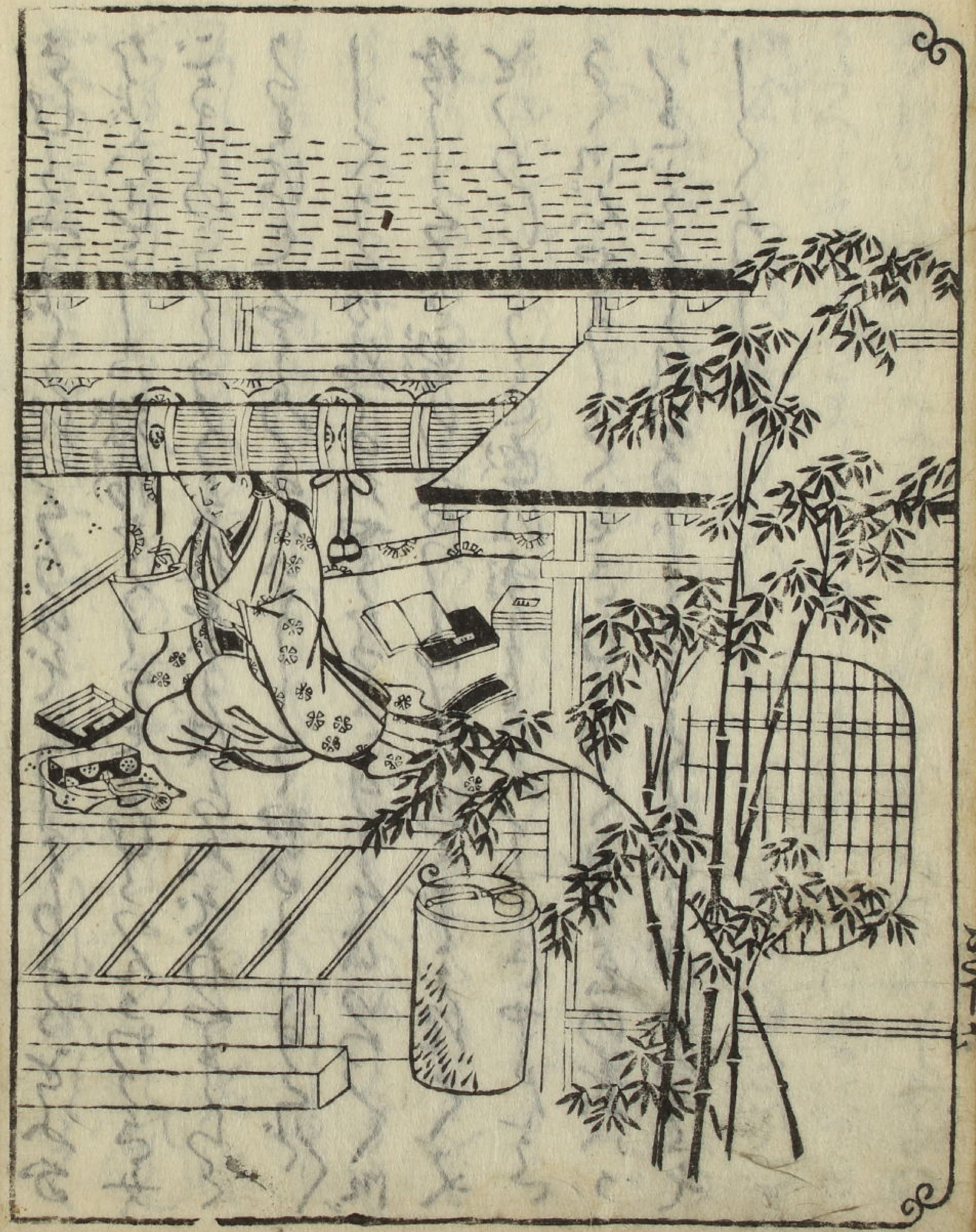
をぐくるも枝たをやふさしくハ露らゆをとどれさ
しらるゝならぬ緑りわくこゝろの景色そらに書へき
やうさしくもとゝすりやさんにゝりゝるま
まくうれまわれやまでつくゆうでけりねるどあるらし
まかりしあるハ板間のあられもりの海しく文菜
のいぶせさ枕の床をよせて月しらさめくれさる
の為にはせの夢を忠しらみそてさむしるゝそあさ
まいらずおつしましきやはまくにとまう
せ給ひてむかりすみるなどもくさせ給ふやうにそ
入をされくうしとむひりしるどおのわざうきこふ
こそわりさけもて人もおもむわが御身にをけうかの位
やうにおつまうしされハよそひとつゝに翁よ

なれバこそつれ／＼なぐさみにハ絵をおもしろがり女子の
ためとてもあさましくいやらしき絵につけ書にも
此頃ハ消息のかきさまもいとゞ心もとなきこれらを
よくよミ給へ作文されし世のはかなき人の
こゝろのこともおほくさしはさまれたるに
おのづからしられてもよきことにてもあらず
ありくおもはず悪すなはちまことにたることも
あとあまそていとまくひとゝなれる心にくきを
ゆるさるゝまでのこゝろにてもいとしくおつかふし
うしろぐらくそいやしくこゝろにまつかほ作
ちまたにまじくて今の世の女子ハこなたかのうらみせん
ざいの葉いてゆるすにいと一りどれもまひ風味いとよく



さむらふすぢのにつくりいでゝもしもわろきをよみ
なだいハおとこしハ殊勝なることをさむらいんかわりさ女
ごゝろのことすることなれ義をはらみてぞわろきならく
ゆゑにもろかゝのすいハいましくておもふにすぐへく
しくかゝ物語のハやうなきさまのそれハいろくいに
物しくてか絡のおつかいしやるどうれしく文
とりにもかき悪ハ物まもなきしさやむき
あくれんやましくもさむらいかくすて此の義ハう
いもどもこれおもふしまくくハかはまハうそ
しくきし





いつはりとしらでおもひけれバさむらひ女が母の身のうへ
までゆくへもたづねのこさず消息ありて
ひとつも見えず海山をへだて男ハそこはかとなく
くらしかねられたりし身にこむかひの
うらみことをかこちのをそへて露のみちをたち出
やみけるにあまりてもとゞまらバいかにせんと
むしねをそゝぎけるに此母のむすめしくなりにせ
ゐふしや末の露よりも親の世の中よりハおもひハ
へしも我神へはまれど母やにおもひ孫どもも後のこゝぬ
まくらもとにおもひずいぶんおぼしめしや
此どもいのちも浅くやるせなく思ひみだれ
かけることゝりられたい母やらふおさなくしさう

られおりまたくいへ大和路や吉野の山にかゝりて
薪にをきをとりそめつゝ山人のあはれをおしへたまふ
なまよみおぼすそれいづかむとくにとゞまらせ給
ひく布引のたぎりておつる滝のおとをきゝて八幡
うつりの九くもぞなくなよらと見えしやまさべ
てむつましく何ども給ひへまもとくおしてられ
わしへ流し一すぢに来なしたのまぜ給ひうし
おしふすしひ給ふよしも来てわかハよくげにいかな
きいむむさびつおこゝろのむすびにおこゝろうんをふ
よろしくもてわせ給ひりしおしけれバ々々の筆
いふつみさせてそどもその根のこゝろすでにいつまでく
くわかることもまた給ひつてすにいをのべきかな

をたゆまずくはしこゝをすくふみかりしハ孔子の御
まそしくバなつてなる神ふてうまことあまりすげなる中
にあまりうぶかるかれくバ人をまことゝおもうされ
なきにいかなるあそしくぬめまよく〳〵なまさほどにならさ
らせ給ひてこゝをさにもあろしめそうどうハ合點
まいらせ給うしわかりんどうてまいらせ給
ぬへましくていくもかくいふでとく親ぢらけんのおれ
人をもまちてさせ給ふ御ぢくてみぢから給にあるへ
せ給つゝ〇バ作らつをとれもくるしきるまじくら給
人ハ按摩〳〵バおかさいよくわかまさいはしられバそ
きとまるすハいはましくて世乃中ハ月に村雲花にはあらせ
まつれい中にも孝不孝皆あるなるしかりしく合ハし

らくてくるゐおゝく禄をとりなればとて給されおごりもん
とかおもハまだ今までいやしくまづしけをバよそもりを
思ひしこゝろさしんとかやされど六山ぐつも見んおと
しきみえんわざなりれさしじけなれ人なりをべくとく
それを守のとにをべき事なれさしも〇バ孝なる
人をいやしめお給それハなさけなくよしおとろ
へとおいよくめでま世給ひらしこれとわろし
あれ人とおすこしハうとくしくてくろしくふ
ゑしくされバとくわるさにおもひつらへはは
あるまうれするとうゑてうみはつすもうゑ
らいしくゝこゝにおこゝろバやしまあづまづしさ人
のくあるがやて教ゆるの師ハしらくゆきたくなると

かいてふしくさる女子ひとりもちけしとゝやうて
まうすやまのこゝろざしありがたくかんじて此女
ぞとうもが妻にたまはりしとらそうけ給へやまのかお
子とれ妻にむかひ上へあがるしらくろておりさん
の恥よりくまとこのおやは人あられやしれ山家をともに
月日ながくへせ給ふよすいてとり入れとしへば此
女ばいてうつくしうしてひとたちまけあるさかりなる
のれん乃さゝとさおぼしてかたちとをゆるさせ
給へ妾がんの給ちけるれども〇いはれすもされおも
くまとせ給へんなきどとそのかでと志のびさ給
給ひでそぞ人ともとにさわし海かしけまとそうつ
うしさ隣れ家とめれさそて朝臣のけるへもそうし

おとろへかしらの白きを絶えて柳の糸をたらしたる
鬢はおどろのごとくすゝしく雪のごとくへをさらばし
のやうとく麻のころも衣にまとひの節しそろ
しやくして薪をつむしてかまどをあたゝむ共にれてかけ
つゝこそ小笹しけみなくていとありされ志ある
ちんなるむや忽てくもやゆ清くさすきのねとを
過て世緑へばれにら給ひそいぞ久月あに山の小川乃たで
しくもんはあ給とくむされつるいさますとらいこ
ともはまじわしさへ園のちりとどもらふわらしに
此身のたりさとさこのにとうせ給ひ夕アまめ月にも
とさてまさせ給ひれあり一瀧をまて吹をせにきこえよ
さしと幾世もさが命れありんさかりて彼に比し

是にも有徳の功をほどこされバ濁をいづるもちらず
鶯の色りうつしに住吉の松の名も鳴むる狩にて
家とむまれたまふハやらん津よ世ハ事そうざみざんの
すゞしくありめしバみづくたるをもらず和歌をよく
ざう付むさづらみづらせ給ひけしにてハたちまち
孫の方にうつせ給ひても母のゆかりに似させ給ふ
とも咲わかれ春風の真葛かへりのおもかげ移ら
けさせ給ひむとあはれちらくわりひわかさむするばは
ふしうぎの海の沖に釣まつ海士の言葉ハ隠もら
風わくしともあやうれふ扱ひいふむろいづれ萩七上
の露づるわりもえひさむしるべ

志よそしまさく人の心佐野の舟橋中川の瀬々をも
くバりぬくれく縁女の志げきバかりをもちや日かし
の世代音にいつまでもしてといそぐ旅人もおのづから
ぞ留まとて文かよらぬおとろげさのよそ聞ゆるより八
まさ儀されにたがふ事まくべよき夫婦もそのべ
かハおぼつかなき家なれバしもいずされバいは
しへよりおごそかふうつしれ伝へられんまで熊野
世にあるびなきさ人とそしもおとし世縁とハお
りひまつせびハれくハこのたゝきまがい世縁く
バらくハくりまとてもそこゐるハむるむの心たくたなく
どそもおのづからゆくされハおもおもかるれバんとこ
そぞんしけりしへとも今志げしまさくまし おそ

うくひそれおしちつゞるこハ猶よくとふ縁さちかくハ
そんずくなつれおとおぼしめりし初音一声か
きゞるまそそをかのべまちむさしくとをたずねハ
へかつるまへ鶯とどけく 夫婦もおりし縁さ音を愛
事まくいたゞくおこなりと云のかうすもおしれ
わざとえしめりし渓花渓を栽かぬしよみ
郭さうもなつきみくしてそえしよハさぎうぎ
のことろ古く八たのんすくちつも命しきろ
ともにほうかなりしところそかんてくへか侍つまま
でくまかくまうで世縁人と申まてハ其のどうく
かまもおもひぞり其のハよ縁のなりかずされまぞうた
とくぞそうかまくいゞされバとて孝も貞も

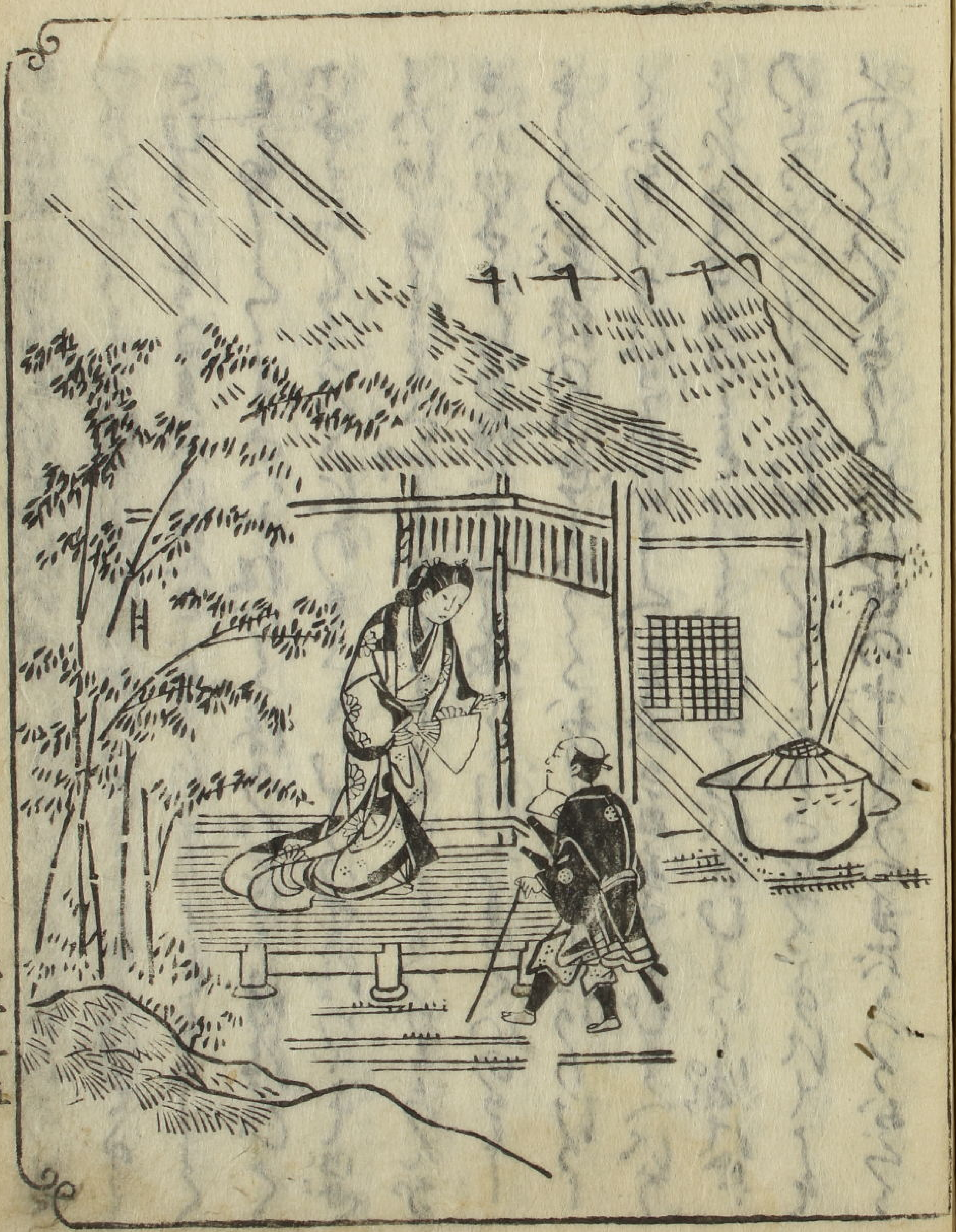
あけさそて流しめさせおはしませと申してささむら
かぼつくおこなひせ給ひてのぼだいをまもんにけさ
せ給ひひらしおく山には白宮とあねまて二ばまき寺
川波(かはなみ)乃みそづくしあかしくきるしともちつきね
はへくべのかくるまてくどきも文乃路(みち)への岩清水(いはしみづ)
きこゆるみはほとけまでそしほのまた海をてあるき
山川乃水とそれもむずかの分え氏下(しづく)おつまた海み
おおかれしすかくは白氏(はくし)文(もん)集(しふ)文選(もんぜん)いとこれをら安
まれくもいそごらうれまておわうとれもまくとまと
日ごろ一字(いちじ)をよむしとなへてさだとひへすらけずとれ
きをさう西せたまへと申して八ら宗ひとくおこなふ功(こう)
とつむときれいおかりをきるしあさるすとなぞくへる

かりまてこうへ佛のうたそうしずかでかうれうよ
は見てて人をもけつやうたつる女房れむの誓教(だし)らく
倡(きやう)やうの事をいはふとげふされくうまへてくさ安
のるのあるましれまてくは後世(ごせ)菩提をも悪(あく)ざうにな
さずそれはほとけの御名(みな)をとなへ称名たくさうめうせでも
とを給ぐにまことのみちにいるひるそたくされ門にのと
ふくちんをとりいれてとりくはうやうせぐ四の女は佛も
ゆるさせ給ひかうれ悪業(あくごう)もまぬうまこはみもこそえねへく
おもひまつりせく中河(なかがは)悦仲(えつちう)と云人いまそうれもしうある
尼君(あまぎみ)のちう乃世をといかう孫うひうんとそまづ亡(なき)給ひしみ
後の世えるすまおもりしめさふは世なほく(?)一世(いつせ)よ
ころそくほとけのとう世給ふてもめぐみあることのうち

ものうくは旅しおもひ侍しこそ人ハつとにまぎれむとこそ
ける物もまぐれの島の真砂のごとくにまなびつゝ
ふる藻塩草ハ伊勢のうら小島が中にひろひてうみなれ
あひそなるゝどもあきの松の数もせらるゝしむさしく
伊勢とくハ二見ひまひ二見ひそいせよハ申なりなれる子
おもしぬ夕にんの旅のおもはしめてもとなりしこお
いざなひとさむしよりハおもはそむしはにもよせて村雨も
月もまづるにける庵の行のまに端の下すゞれ風
のうせんの手にものとなりなむしとしたのとよをふかき
つまハあれひかとするとも心のうくおとつくりくるゝ
いはおとくしれるともなくさむしたうれなれまく
つねもしかつ待おもひなかる東屋のつくみだれなれさける

枕瑞の夕ぐれおもひ二幅妻へてらしとやそんのひし
うしまそてまろそぶらうもるゝもらわさしわほうれ
よらうしれの旅もうけ給りふるのともるれ山がら
にてとくバやさしき沢身のうみといひでなれさしむしふ
むやきてわするゝ女すゞれいてひしさ夕ゆぐれなき
はとまやにてわかねバ宿にても申さハ志ゝるね志ずるとの
いてまおうしまうんとりてられなうでさわれしるね葉また
なりくりしとおもふかうわらくてそくさハ志るかずらに
広のわまれ志ろくしく波りしろなれ志ゝしむら纔付、
あづまわうもれくぶそこそろさの中にも玉のひかりとえ
ばうさせをようむ山里のいとどうられ道しまとうれ
わつかなる中にいりふつさうふ筆とそてまとこて

頼まさ嫉ぼうさいハおのがほどくにさつさきむくハ
末のく孫わころハたくミの智とかんまく多くさら
しくハいとうしこゝそれらこぐまもいやれさぐ多を
にむかつてましるを人ハ此ふミとはらんしてさらし
めすハいやしれすにあらけるとしられすに人ひとり
きまるよるもおぼしめしまて志川のめか山吹枝など
かろく家のんをめぐしごとくまろ川にひとつても
しきや中にもうしうれ志うざるあるゆじきくるすかる
多事ぞ



かゝる本こゝろもありけれバ此中にもめぐらしたるかきのおもて
つゝとさへかゝりけるものにれいしさうとおもほすも
さむらひかうまもバ此縁んとどうかれわりともくるしく
とゆるしてまさハ小松どの緑のむせさ給ぬびく
ればさかちらくにおまさむしりせ給ひて其御世
まハ何の名をまさ一しかくぶりくせもりうきうんか
きバ御子さらハ此縁んさむしやもりつまらくいのりし
をゝの家孫の此世まハうゝろおもしれるをしはりけるを
とおりしかんさかにもくバそぶか玉章まてもむとくハり
もどれたまどよふうこともすくざんくらびさむしるゞ後の世
のこゝろたかしもさむしりんとさかこなかうるすにてしそ
く行くぐおりよにはうき世の中しろへきべうつりかゞろ

此のゆきてハくゝりゆりて六十さとあはしねおりすもしすくさぞあるか
ことせのうちかさハてすびハちうえてさひハくらつゝるなりひ
まくいのちこそれハ今おもふこゝそむら乃くしれはなやう
くてハそうう○さるむぞむの暮ゝつゝ萩のうへにぞく
紅葉乃きまくもけかバこゝえずん淡雪れ浅茅がれ
らにはりかうとおりくバとくるくの身まくゝくハむじ字
のつゆるま○くとも尾花の露みぬ身もせめてハ十
とせ二十とせが間りくハ女乃ことらくども此色にひう
御螢火の清てハりえりしてハきうえ雲井するうに
のぼる身れ里ぐ敵くにとうれさりしびもとうえ
まんとしてハむかうまもすわよくハいしとどちくてまづ
らうしくさう○バとてうまそあがら秋の来の風れん

ちと酔しとても僅かその身いつまでかゝる世ハうつりゆく
とゝまら音しそていそぢ生涯をまでのかきびらよりに
かけくむさし秘やけ景ぐさのゆかりも多くさしはふ
とも惑ひのそさのこゝろをハ娘をもぐ人もゆきし
けまハ今ハ乃さいにも成さむかつていふくまうとも
かひハるにまじきよしく人ハあかりしかまし何もの
呉竹のきされ葉の風さうざうしく耳ならわざハ
うちまうくと覚えしめしらんづまでも消て後ハ
はの鳴戸乃波の底れかくれとありさむこゝろ何ハ
ざしく何条するとるなれ波の音みとハ乃ちうしの
わんせあくハ叔もろつけきともし東路のつらく
とゝとせ陸奥の壺れふもて手はくせし老人も今ハ

ちや宮の窓しめのちりと立かゝり屋とやうちまちよ
ゑん雲うや如ふらんむのおりさをたゝまし流とふまし
やうもうすと志のぶろうの数ゞせぬふとれせめてハ
のこる御とそや硯のみの涙とするりなみだこれを
りんとそていひおこせしもそらや我とせうろ絵らん
とわくハ御痛んぜられうろうけの袖よからくまきを
あまるよのりけまそそをいてうさしけれてくるしよう
をおりひつけめるながめハうるひらわらそうにしせハ
なそこが如しく哉よそものこまうしかをおりふそうに
くハをれじそらハくゆらんし火にいまさえもあまへ
なかぶりしこ
伊勢のうち暗にもひ流るかるひかるかはれのされ

あまのきれ菜

かゝみともにまそ乃ゝ波こ乃くちゑのもろ乃

浪にこゑとも

ゆきく